

# I 国語科「伝統文化を楽しもう」(1組)

## 1 学習の概要

本単元では、「伝統的な言語文化」に関わる学習をしました。まず、「伝えられてきたもの」を読み、伝統文化についての知識を得ました。次に、狂言「柿山伏」の実演をDVDで鑑賞し、現代の言葉遣いとは違う、狂言独特の言葉遣いや言い回しに触れました。また、解説文『柿山伏』について」を読み、人の失敗や間違いから生まれる滑稽さやユーモアが現代にも通じること、時代背景の違いから登場人物のものの見方や感じ方が現代と違うことを理解しました。最後に、「柿山伏」の気に入った場面を音読したり実演したりする活動を通して、伝統文化を楽しむという言語活動を行いました。

単元全体を通して、子どもたちが自分(達)の課題を見つけ、課題解決のために積極的に学び合うために、付箋やホワイトボードを活用したり教室掲示を適宜更新したりしました。これまでの活動(思考、情報)を視覚化したりすることで、より活動への意欲を高めたいと考えました。

## 2 ねらい

- 日本の伝統文化に興味や親しみをもとうとする。
- 現代とは違う言葉遣いや言い回しに気づき、それを使って狂言を楽しむ。

## 3 取り組み

### (1) 第1時(付箋をつかった導入)

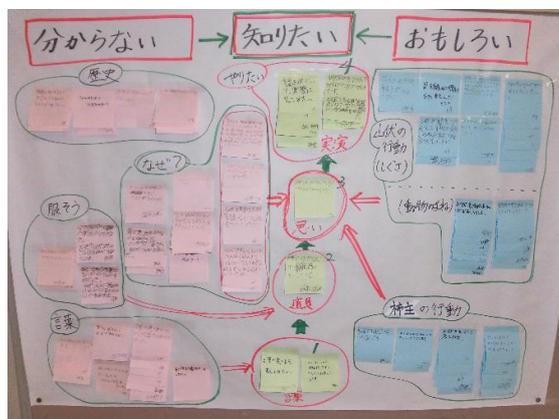
『伝えられてきたもの』を読み、伝統文化にはどんなものがあるか知り、『柿山伏』のDVDを鑑賞しました。ワークシートに「柿山伏」を鑑賞しておもしろかった場面や分からなかったことを書き、それらを付箋に書き出して模造紙に貼りました。ピンク(分からなかったこと)、青(おもしろかったこと)、緑(知りたいこと、やってみたいこと)で色分けをしました。付箋に書き出したもので同じものは重ね、似たものは近くに貼っていきました。自由に移動してよいものとし、貼り出されたものを見たり話し合ったりして、書き加えたいことはプリントに赤で追記しました。自分の課題が決まった児童はプリントに書かせ、まだの児童は次時に決めるので、この付箋マップを見たり、相談したりして決めることを伝えました。

### (2) 第2時(スモールステップの話し合い活動)

付箋の意見を整理し、個人の課題を考え、次にみんなで取り組む課題を考えました。

- ①「言葉や道具などについて知る」
- ②「柿山伏に込められた思いについて考える」
- ③「音読(実演)してみたい」

その後、『柿山伏』について」を音読し、狂言のおもしろさやそこに込められた思いについて話し合いました。個人→フリーグループ(自由に移動して話し合い)→4人グループ(ホワイトボードにまとめる)→全員(黒板で意見を集約する)の順で行いました。初めは話しやすい人と、次に少人数の生活班で、最後に全員でというように、徐々に人数を増やすことで自分の考えを伝え合いやすいように展開しました。



「課題を見つける掲示物」

初めは話しやすい人と、次に少人数の生活班で、最後に全員でというように、徐々に人数を増やすことで自分の考えを伝え合いやすいように展開しました。

(3) 第3時（前時の学習をつなげる掲示物を利用して）

狂言のおもしろさやそこに込められた思いについて、前時のホワイトボードを印刷し、掲示物としてまとめておきました。放課にも見られることで学習の継続性が高まりました。この時間はそれを元にして、改めて狂言のおもしろさやそこに込められた思いについて話し合いました。ワークシートにこれまでの学習で分かったことなどを整理しました。

(4) 第4時（自分の学習活動を具体的に決定）

ワークシートに具体的な自分の学習活動を考えて記入しました。書けた子どもは担任のチェックを受けてから活動に入りました。「狂言の話し方をよく聞いてまねしたい」等がありました。全員が書いたら同じ場面や活動の児童でグループを作らせました。お互いに見合ったりアドバイスしたりしました。



「活動の様子」

(5) 第5時（特別教室を使って体を動かしての活動）

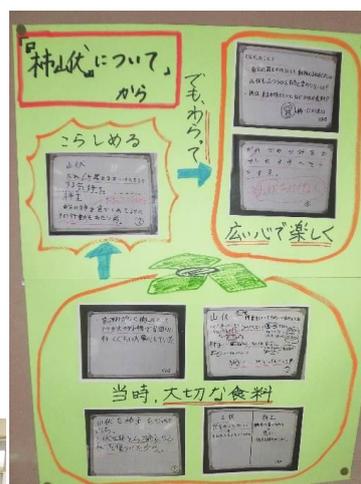
特別教室で自由に活動しました。全体発表したい子どもの希望を聞き、最後にその時間を取ることにしました。みんなで動作（しぐさ）や話し方などを話し合い音読（実演）しました。自由に映像資料を見てもよいものとし、マットやイスも使って行いました。自分たちでやりたいことや場面を決めているので大いに盛り上がり、狂言の世界にどっぷりとつかることができました。最後に学習を振り返ってまとめを書きました。



「活動の様子」

## 4 成果と課題

付箋やホワイトボードを活用し、子どもたちが自らの課題を見つけ、それに向かって活動していくことで、一人一人がより主体的に日本の伝統文化に興味や親しみを持ち、狂言を楽しむことができました。今後は学習においてだけでなく、様々な場面で自ら考え、他者との対話的な活動を通して、より積極的に物事に取り組めるようになることを願っています。



「課題に迫る掲示物」